
逃がした魚

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

逃がした魚

【Nコード】

N1048B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

成人式に出た俺。そこで久し振りに見たあの娘は愕く程奇麗になっていた。それを見て惜しいと思っていると周りからせつつかれていって。成人式のお話です。かなり早いですがお許しを。

第一章

逃がした魚

成人式。俺はこの日が来るのを何とも思わずに待っていた。

ただ一つ歳を取るだけだと思っていた。他の何だというんだと思っ
っていた。

酒が飲める、もう飲んでいる。高校二年の時から普通に飲んでい
る。今じゃ立派な酒豪だ。日本酒、それも辛口がお気に入りだ。つ
まみは豆腐が好きだ。

煙草が吸える、興味はない。煙草は吸わない。ダチは何人も吸っ
てるが俺は興味がない。酒はともかく煙草の何処がいいのか本当に
わからない。

そんな俺だから成人式なんて只の恒例行事とばかり思っていた。
他の何でもない、まあ仕方なしに出てやるだけだった。本当にそれ
だけだった。

大学の入学式の時に着ただけのスーツをまた出して着る。何か匂
いがする気がした。

「虫食いとかねえよな」

最初に気になったのはそれだったがそれはなかった。色も変わっ
ちやいない。それをチェックしてとりあえずは安心した。それから
家を出て式場に向かった。

何か式場では俺と同じスーツの奴等がゴロゴロとしていた。何で
もない、よく見れば俺のクラスメイト達だ。幼稚園から一緒だった
奴もいる。そいつ等がスーツに着替えて来ていたのだ。制服姿ばか
り見慣れていたからスーツ姿は新鮮だった。中身は変わっていない
がそれが印象的だった。

「よお」

「ああ」

中学で一緒だった畑中と挨拶を交わす。多分向こうも俺と同じこ

とを考えているのだろうと思しながら。

「何かあまり変わらないな」

「学ランがスーツに変わったただけだな」

俺は笑ってこう言った。学生服を着ていたのはほんの少し前に思える。それ程大して変わってはいなかった。俺も今目の前にいる畑中も。何も変わっていなかった。

「そうだな、何か他の奴もな」

「そうだな」

俺はそれに相槌を打つ。他の奴等も一緒の学校だった奴ばかりで知ってるのばかりだ。見れば本当に変わらない。少なくとも男はそうだった。

「女の子もそうかな」

「案外そうなんじゃねえの？」

畑中は軽くそう言葉を返してきた。

「だってよ、高校卒業してから。ええと」

「まだ二年も経ってねえよ」

「そうだよ、そんだけだぜ。あまり変わっていないさ」

「そうだよな」

「そうそう、そんなに変わるわけないって。見ろよ」

そう言いながら側を通ってきた女の子を一人指差す。中二の時一緒のクラスだった娘だ。奥田さんだ。何かセーラー服がそのままスーツになった感じだ。本当に変わらない。

「あいつだってあまり変わっていないじゃないか」

「あら、言ってくれるわね」

その話を聞いて奥田さんは顔を俺達に向けてきた。少しムツとした顔を作ってこちらを見据えてきた。

「これでも私結婚したのよ」

「嘘っ」

俺も畑中もそれを聞いて思わず声をあげた。これには本当に驚かされた。

「本当よ。ほら、その証拠に」

「ここで左手を見せてきた。見ればその薬指には。紛れもない証拠がそこにはあった。」

「これでわかったでしょう?」

「本当だったんだ」

「それで今は主婦よ。まだ三ヶ月だけどね」

「結婚、ねえ」

「もうそんな歳かあ」

「もうって二十歳じゃない」

「彼女はまた言った。」

「結婚だつてできるし子供だっている娘もいるわよ」

「子供!?!」

何か話がさらに俺にとって信じられない方向へいつていた。何か訳がわからなくなってきた。

「そうよ。私はまだだけどね。横田さんとか」

「ああ、横田さんね」

彼女とは一緒のクラスになったこともあまり話をしたこともない。けれど悪い印象は持つてはいない。何か大人しくてしっかりとした印象は持つていた。

「あの娘が」

「そうよ。一人ね」

「横田さんも来てるんだよね」

「ええ、流石に子供は連れて来てないけれど」

「だろうね、やっぱり」

「それは幾ら何でもね」

やっぱりこうした場所に子供連れは何かとまずい。だからこれはわかった。だがそれにしても。もう子供がいる子もいるのが何か信じられなかった。

「他にも結婚した子とかいるんだよね」

「石橋君とかね」

「ああ、あいつも」

何か頼つぺたの赤いやたら口の悪い奴だった。あの憎たらしかったあいつも結婚して奥さんがいると思うと別世界に来た気持ちになった。

「近藤君も」

「あいつもか」

幼稚園から一緒だった奴だ。痩せて色の白い奴だ。あいつも結婚したかと思うとこれまた別世界に来た気持ちになる。何か馬鹿やってるのは俺だけに思えてきた。目の前に一緒にいるツレだって同じだろうにどういわけかそう思えてくるから不思議だ。どっちにするもつそういう歳なのは自覚せざるを得なかった。

「他にも。いるけど」

「ああ、もういいよ。何かタイムスリップした気持ちになったから俺はそう言つて話を止めてもらった。

「何か俺つて全然変わってないんだな」

「そうね、変わってないね」

しかもそれをはつきり言われた。余計に気分が悪くなった。

「言つてくれるね」

「だつて本当に変わってないから」

「何時から」

「小学校の頃から」

「つて全然変わってないってことかよ」

「そうね、何か」

「これでも背は伸びたぜ、結構」

「それでもよ。中身がね」

「きついな、何か」

「まあまあ。それはそれでいいじゃない」

「そうかな」

何か奥田さんの方がお姉さんみたいだ。同じ歳の筈なのに。けれどこれが結婚して人生経験を積んだということなのかも知れないと

逃がした魚

も思った。学生と主婦ではその重みが違うのも当然だ。

第二章

「あんたは変わったのにな」

「嫌だ、全然変わってないわよ」

「いや、変わったよ」

俺から見れば本当に変わった。それは否定する気はなかった。当然嘘でもなかった。

「何ていうかさ、あんたのお母さんそっくりになったな」

「えっ、そう!？」

「ああ、何か。すごい似てきたぜ」

「それよく言われるわね」

「そうだろ」

ここで奇麗になったとかは生憎言えなかった。言ったらそれで告白みたいになるししかも相手はもう結婚している。言ったらやばいのは俺でもわかることだった。

「クローンかと思っただぜ、いや本当に」

「だったらうちのお母さんにも久し振りに会ってみる？」

「いや、それ遠慮しとくよ」

これは真剣に断った。彼女のお母さんにはガキの頃悪さをしてこっぴどく怒られたことがある。何をして怒られたのかはよく覚えてないがとにかく派手に怒られた。だからそれは勘弁願いたかった。

「それにしても本当にな。そっくりだよな」

「岡本さんもそうかもね」

「あいつも!？」

「うん」

「そういやあいつとあいつのお母さんってそっくりだったな」

岡本という女の子とは幼稚園からの付き合いで家もすぐ側だった。そいつのお母さんは細面で気品のある奇麗な人だった。しかもおしとやかだった。だが本人は。

太っていて小生意気な女だった。色は白いが太っていたので可愛
いなんて全く思わなかった。そいつとはガキの頃飽きる程喧嘩をし
た。はつきり言って嫌な女だった。それは今でも同じだ。

「そうよ。確か今日来てるけど」

「小学生の頃より太ってたりしてな」

「レディーに対してそんなこと言わないの」

これにはすぐにお叱りの言葉がきた。

「そんなのだから子供だって言われるのよ」

「へいへい」

「探してみたら」

お叱りは半分耳から捨てていたがそこでふとこう言われた。

「今どうなってるかって？」

「そうよ。会ってみたらいいわ」

「まあ物見遊山でな」

「いい加減にしなさい」

これははつきりと怒られた。

「じゃあ行くか？」

「いや、俺はいい」

連れにはそれは断られた。

「それよりもちよつと他に会いたい奴がいたからな」

「サッカー部の連中か？」

「ああ、そいつ等に会ってくる。じゃあな」

「ああ」

これで一旦別れた。そこでまた彼女が声をかけてきた。

「で、君も行くのね」

「君って」

増々俺の方がガキに思えてきた。

「あのさあ」

「あつ、噂をすれば」

ここで話が急に変わっちまった。タイミングがいいのか悪いのか。

「岡本さんよ」

「えっ、何処!?!」

残念だが岡本さんらしき人は俺の視界には一人もいなかった。

「何処よ」

「冗談で言ってるの?」

「冗談でこんなこと言うかよ。何処なんだよ」

「ほら、あそこに」

「あそこって」

「白いスーツの娘よ」

「白いスーツ!?!」

言われてやつと視界にいる一人のその女の子に気付いた。見ればかなりの美人だった。

細面で肌がそのスーツに負けない位白くて髪とはそれと正反対に黒くて長い。肩を奇麗に覆っている。顔は穏やかで何処のお嬢様と思う程だ。しかもかなりスリムでそれなのにプロポーションはやけによかった。とりあえず俺の記憶にある岡本さんとは一見似ていると言えは似ているがまるで違うものだった。

第三章

「あの娘よ」

「………嘘だろ」

俺は思わず呟いてしまった。

「あれが彼女かよ」

「そうよ」

「そうよって全然違うじゃねえか」

何か自分の目すら信じられなくなってきた。自分の目が信じられなくなる時があるってのは聞いたことがあったがそれが実際に自分が経験するとは幾ら何でも夢にも思わなかった。何かおとぎ話の世界に舞い込んだみたいない気分になってきた。

「あれが岡本さんなのかよ」

「聞こえるわよ」

こう言ったところで注意された。

「それに失礼でしょ」

「けどよ」

信じられないことには変わりがない。頬つぺたをつねりたくなる位だった。

「よく見なさいよ。彼女だから」

「確かに」

やっと落ち着いてきた。確かにその通りだ。顔なんかは痩せてはいても面影がはっきりとある。そっぴや彼女のお母さんにそっくりだ。あの人にそっくりならそりや美人にもなるだろう。何か自分勝手に心の中で頷くものがあった。

「岡本さんだよな」

「やっとわかったわね」

「わかるも何も」

だが口は俺の心とはまた別に動いていた。

「あんなに綺麗になるなんてな」

「驚いた？」

「ああ」

正直こんなに驚いたことは滅多にない。この二十年でそんなに記憶にない。

「何とまあ」

「はつきり言つてあの娘のお母さんにそっくりよね」

「そうだなって彼女のお母さん知ってるのかよ」

「一度家に遊びに行ったから。ほら、同じクラスだったことあるでしょ」

「覚えてねえよ」

「何よ、冷たいわね」

「冷たいも何も奥田さんとも一緒のクラスだったことは中二の時です」

「小学校の時に二回、中学校で一回」

奥田さんは俺が言おうとしたところでムツとした顔で言い返してきた。ちなみに小学校の学年割は二年で一つの単位だ。ということは小学校では奥田さんとは四年一緒のクラスだったことになる。

「よく忘れられるわね」

「そついやそつだったか」

「全く。物覚えが悪いところは同じなんだから」

「そつだっけ」

「そつよ、まあいいわ」

とりあえずその話は終わった。

「まあ彼女とも同じクラスだったから。お母さんとも会ってたのよ」

「で、そつくりだと」

「そうね。彼女完全に母親似よ」

「まずつたな」

俺はまた本音を呟いちゃった。

「まずつたなつて？」

「あんなに綺麗になるなんてよ」

「大学でも大人気らしいわよ」

「そうだろうな。よく考えたら彼女のお母さんがあだからな。それにそっくりだと」6

「美人になる筈よね」

「しくじったよ。声かけとくんだった」

「小学校の時に？」

「いや、そこまではいかないけれど。中学生の時だったな」

冗談抜きに心から後悔した。あの時声をかけていれば今頃は。それを考えると無性に自分に腹が立ってきた。逃した魚は、つてやつだ。今それを考えてもどうしようもないがつついっつい考えちまう。

「声かけてりゃなあ」

「ふられたかも知れないわよ」

「きついね、奥田さん」

俺は彼女に顔を向けて言った。

「けどあの時はなあ、仲悪かったし」

「君もかなり性格悪かったし」

「へいへい、否定はしませんよ」

「そんなのだから。捻くれ者だね」

「へッ、それで今後悔してるのさ」

俺は奥田さんにそう返した。

「こんなことになるんだったらなあ。本当に」

「何か愚痴愚痴してるわね」

「愚痴も言いたくなるよ。見るよ」

どいつもこいつも岡本さんを見ている。あまりにも綺麗になつたのでヒソヒソと話す奴等までいる。本人はそれに気付いているのかわからないのか。平気な顔だ。気付いていたらもうかなり満足しているだろう。気付いていなかったらかなりの天然だ。まあ俺が知っている岡本さんなら気付いているだろうとは思うが。

「注目の的じゃねえか」

「そうよね、あれだけ綺麗だったら」

「どうしたもんかね」

「どうしたもんかねって」

俺はここで無意識に妙なことを言っちまった。言っただ瞬間には気付かなかつたがすぐにそれを突っ込まれた。また迂闊なことをやっちまった。

「迷ってるの？」

「ああ」

また無意識に答えちまった。何か夢うつつだった。そしてその夢うつつのうちに俺は墓穴を掘っちまっていた。気付くのは奥田さんの言葉からであった。

「じゃあしつかりしなさい」

「しつかりしなさいって？」

「男ならね、当たって砕けるよ」

「当たって砕けるって」

「私だってね、何で結婚したかわかる？」

「あかさ、何言ってるの？」

俺は最初奥田さんが何を言っているのかわからなかった。

「何か訳わからないんだけど」

「自分の言葉反芻しなさい」

「反芻って牛じゃないんだから」

「とにかく思い出してみてよ」

「あ、ああ」

何が何かわからないままそれに頷いた。そして自分の言葉を思い出す。

第四章

「どうしたもんかって言って」

「迷ってるのって聞いたらああ、って頷いたわよね」

「そうだよな。けれどこれって」

「わかった？」

「.....」

何となく事態が飲み込めてきた。この流れは。

「ってことはだ」

「そうよ、やっとわかったわね」

奥田さんは俺を見上げてニヤリと笑ってきた。背の低い彼女は俺を見上げるしかなかったのだ。その背の低い娘に俺は一方的にやられてるわけだが。

「やってみたら？」

「告白かよ」

「そういうこと、男ならドーンとね」

「ドーンっとなって」

俺がまだ戸惑っていると奥田さんはまた言った。

「私だって今の旦那にはかなり強引にやられたんだから」

「強引になって」

「毎日毎日強烈なアタックでね。それでね」

「そうだったのか」

「迷うより動け、よ。とにかく」

「動け、か」

「岡本さん彼氏いないしね」

「何でそんなこと知ってるんだよ」

「女の情報網舐めないの。全部知ってるんだから」

「ってというか奥田さんの情報網でしょ」

「そう言うかも知れないわね」

昔から奥田さんの耳年増は知っていた。中学校の時はそれで有名だった。それは今も相変わらずだったというわけだ。いいのか悪いのか。少なくとも今の俺にとってはいいみたいだが。

「だからよ」

「ここで度胸を据えて」

「そうよ、当たって砕ける」

「砕けたらどうするんだよ」

「また向かえばいいじゃない。そして」

「実るまで当たるのか」

「そうよ、やってみて」

「逃げた魚なのに」

「逃げた魚はまた捕まえればいいのよ」

気軽に言ってくれると思うたが言われてみればその通りだ。だから言い返すことも出来なかった。

「違うの？」

「それはそうだけど」

「じゃあ覚悟しなさい。海に飛び込んででも」

「よし」

言われていたらその気になってきた。俺も単純なものだ。

「いざ鎌倉へ」

「その意気よ」

「じゃあ行つて来るよ」

「ええ、頑張つてね」

奥田さんの笑みが見えた。何か同級生というよりは姉貴みたいな顔だった。俺には姉貴なんてのはいなかったがそんなふうな顔に見えた。

「勝利を祈るわ」

「それ以外はないと思つてことかい」

「だって、これは勝負なのよ」

「まあそうだけど」

恋を実らせるのか実らせないのか。そうした意味では確かに勝負だった。負ければ問答無用で崖っぷちからまっさかさまの。それを考えるとんでもなくリスクが高い。だが。

「やってやるぜ」

「その意気よ」

俺はもう引く気はなかった。止まる気もなかった。

「ここまで来たらな」

「そうよ、やらなきゃね」

「何かわかったよ、逃げた魚は」

「また捕まえればいい」

「そういうこと、何度でもね」

「海に潜っても」

「捕まえて来るよ、今から」

「見てるわ、彼女をゲットするのを」

「ああ、じゃあな」

「うん、それじゃあね」

俺はその逃げた魚を捕まえに向かった。何がどうなるかわからない。けれど何があっても捕まえてやる。そう決意していた。

何度逃しても振られてもいい。最後に捕まえていけば。

俺は岡本さんの方に一人歩きだした。当たって砕ける、そう心の中で呟きながら。

逃げた魚ならまた捕まえる。それだけだった。何度でも。俺は今その手を出そうとしていた。

逃げた魚 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1048b/>

逃がした魚

2008年11月7日06時54分発行